

し せきほうじょうしていあと えんじょうじあと 史跡北条氏邸跡（円成寺跡）の概要



市HP史跡解説

史跡北条氏邸跡（円成寺跡）は、鎌倉幕府執権北条氏の館と、鎌倉幕府滅亡後に北条氏の菩提を弔うために建立された円成寺との複合遺跡です。

鎌倉武士の本拠地伊豆の生活と、南北朝～室町期に繁栄した寺院の姿を伝える貴重な遺跡として平成8年（1996）国史跡に指定されました。

1160年、平治の乱に敗れた源頼朝は、伊豆の蛭ヶ小島に流されました。それから20年後の1180年、頼朝は、平氏打倒を掲げて挙兵しました。この戦いで頼朝を支援したのが、妻政子の実家である北条氏でした。

頼朝が鎌倉幕府を確立すると、時政・義時父子をはじめ、北条一族は、頼朝の側近として支え、頼朝の死後は執権につき、幕府第一の権力を得るようになりました。

北条氏の館

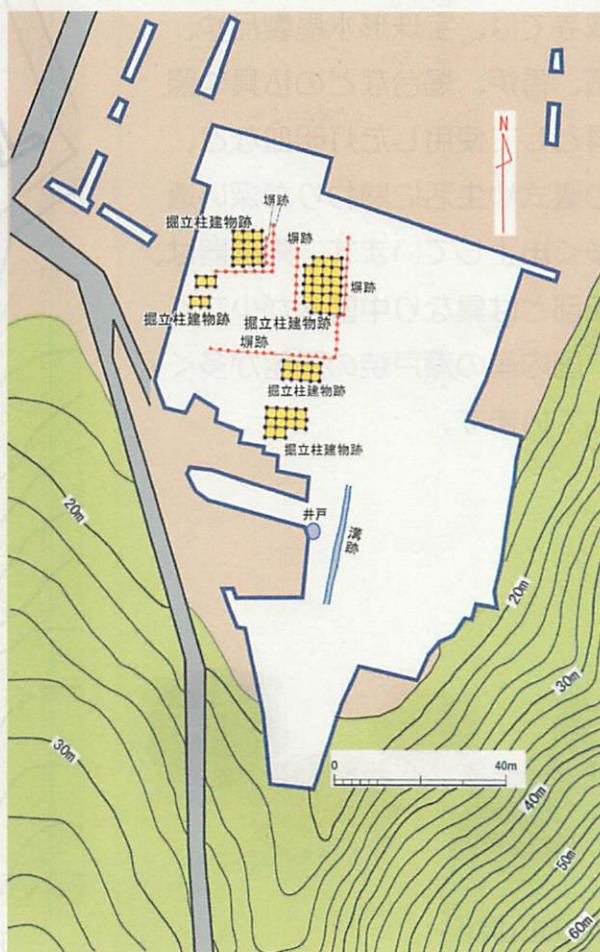
平安時代末から鎌倉時代前半にかけての約100年間に建てられた建物や堀、井戸、区画溝などが発掘されています。

柱の間隔は2.1mで、面積100㎡（約30坪）を超える建物もありました。小さな建物は倉庫か馬屋と考えられます。

鎌倉時代後半の建物はみつからなくなるため、館が使われたのは、3代泰時の頃までで、それ以降、北条氏の生活の中心は鎌倉に移ったものと考えられます。



てんちくしゃわん
中国産の天目茶碗



北条氏邸が最も栄えた頃の建物配置
（12世紀末から13世紀前半）

館から出土する遺物の9割は、「かわらけ」と呼ばれる素焼きの皿です。かわらけは、公式な場での宴会や儀式などで使われることが多い器です。また、中国から輸入された陶磁器が多く出土していることも、大きな特徴です。茶を飲むための天目茶碗や四耳壺、合子、香炉など、一般には手に入らない高級品も含まれていることは、北条氏の権威、財力の高さを表しているといえるでしょう。

円成寺

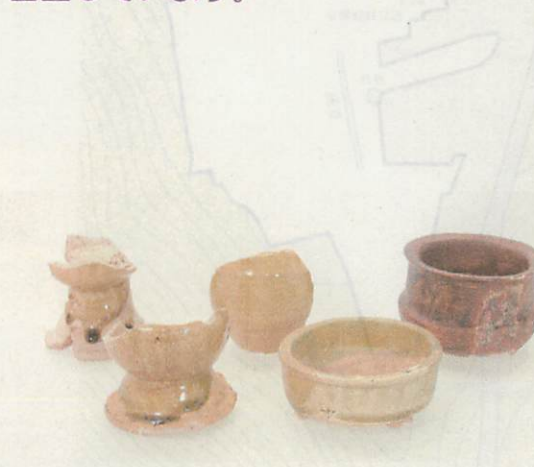
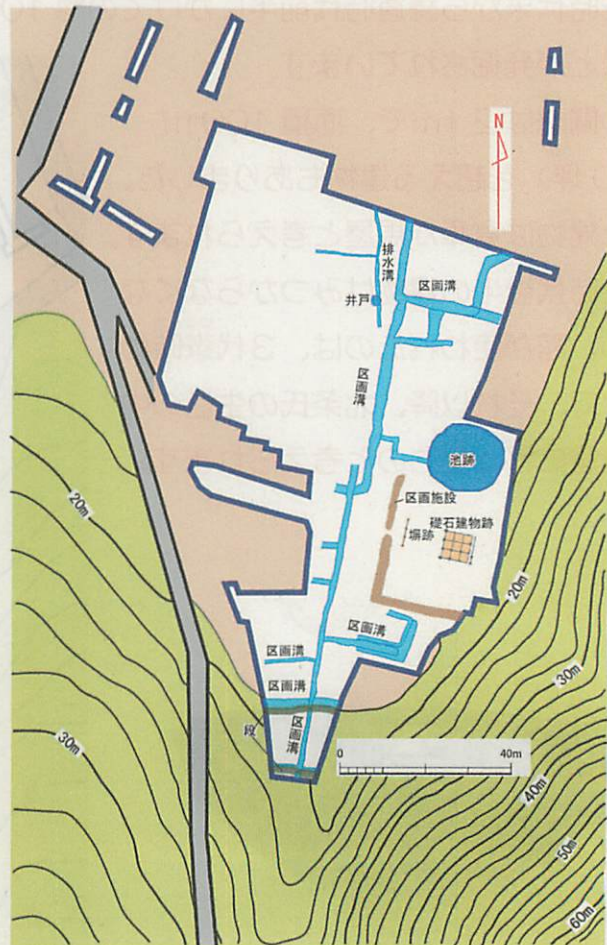
1333年、鎌倉幕府が滅亡し、北条一族の多くの人々が滅んでいきました。しかし、一族の女性たちは生き残り、14代執権高時の母である「覚海円成（円成尼）」という尼僧にひきいられて、伊豆に戻り「円成寺」を建立しました。

円成尼亡き後は、伊豆国守護をつとめた山内上杉氏の庇護をうけ、上杉氏の女性（にゅうし）が尼となって入寺するなど、繁栄していきました。

円成寺に関連するものとして、礎石建物、池、区画施設、井戸などが発掘されています。

礎石建物は、隣に池が配置され、区画施設で囲まれるなど、寺の中心的な建物であったと考えられます。寺が最も栄えたのは、14世紀後半から15世紀前半にかけての時期です。

円成寺では、宝珠形水晶製品や、仏花瓶、香炉、燭台などの仏具や照明器具として使用した灯明皿など、寺院の儀式や生活に関わりが深い遺物が多く出土しています。陶磁器は、北条氏邸とは異なり中国産が少なくなり、国内産の瀬戸焼の陶器が多く出土しています。



瀬戸焼の仏具

円成寺跡の建物・池・溝の配置

（14世紀後半から15世紀前半）